
あの歌が聞こえてくる

文典

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの歌が聞こえてくる

【Nコード】

N5440B

【作者名】

丈典

【あらすじ】

夢もやりたい事も無くただ毎日を過ごす主人公マサル。大学受験のときに勇気を出して自分と向き合ってみる。しかし、なかなかうまくいかない。そんな中、親友のトシにやりたい事が出来る。うまくいかない毎日にイライラしてトシのチャレンジを応援する事が出来ず、喧嘩をしてしまう。そんな時、昔、父親に連れられていった居酒屋で昔よく遊んでもらったお兄ちゃんに再会するのだが・・・。

1 バリバリの芋ケンピ

七月の半ば、夏の独特の香りと、蝉が八年振りに地上に出てきて、タッチの再放送が始まるころ、小さなアパートに俺は住んでいた。こんなありきたりの始まり方しか出来ないくらい冴えない俺、名は森田^{マル}五郎丸。歳は18。道をそれる事無く今までやってきた。それでも、俺は「周りの輩とは違う！俺は歴史に名を残す人間だ！」と頑なに信じて生きていた。まあ言わばどこにでもいる三流高校の三年生だ。何か一つの事を続けていれば話は別だが、何かを続けたことがない。しかも今年は大学進学か就職活動というめんどうくさいが避けては通れない、言わば“人生の選択”をしなくてはならない時だった。やりたいことが特にない俺は本当に辛い。ましてや頭の良い方ではないだけ、とりあえず大学という選択も難しかった。そして、やりたいこと、から、やれること、をと、次第に現実を見なくてはならない。そうたしか、去年の夏に高校一年生の頃の友達の山田サトシ（トシ）に誘われて始めたサーフィンも、夏が終わると共に終わりを告げた。始めたときは女の子にもてたいと単純な理由で意気込んで、ブランドの板とブランドのウエットスーツ、冬の冷たい海に備えてブーツや、手袋まで、やっとの思いで寿司屋の配達バイトで貯めたお金をつぎ込んで買ったのだがあえなく断念。当時の俺は「やっぱ男は海っしょ！」と*海人*とプリントされているTシャツを着て近所に住む幼なじみの大嶋^{てっほ}徹に「今日の波は良い」とか、「風が入ってきている」とか、「今日はオフショアだな！バリでファンウエーブしてーな！」とうんちくを並べ、携帯で波情報のサイトを見ながらボブ・マリーを聴いていた。俺はこのとき必ず言うセリフがあった。昔テレビで見た、ボブ・マリー特集のときの有名なサーファーが「ボブ・マリーの曲は、いかにも南国ラテン系

の音楽なのに、ディープでスピリチュアルなメッセージが、引いては押し寄せる波のようなスローでメローなリズムに乗って、優しく心の奥深くまで染み込んでくる。遠いジャマイカの海を思い浮かべる」というセリフを丸暗記し、いかにも自分の言葉のように語っていた。しかもサーファーがよくやる握手の練習にてつぼうはよく付き合わされていた。今ではそんなサーフ用品達はてつぼうの一発ギヤグにも使われなくなり、ついには部屋のホコリをかぶったオブリエと化していた。母親のトシコ（カー）は「まったくせつかく高いものかつて！こんなでかい物、ビート版にもなんないじゃない！使わないならリサイクルショップに持ってきなさい。」と言い続けているが「進路が落ち着いたらまた行くんだからいいの。」と言っていた。が、それには別の理由があった。そのリサイクルショップには小学校四年生のときに隣の席になって恋をした、かの青山美土里^{やん}が働いていて、いかにも挫折した自分の姿を見せるようであった。ミドリちゃんとは高校二年生の頃に駅で会い、少し話をした事があったが、むこうはあまり俺の印象というものがあまりないと思う……。クラスのマドンナ的存在だったミドリちゃんは、この町には似つかないほど上品な整った顔をしていた。一時アメリカに留学したという噂を聞いたが、今年の春にできたばかりの【リサイクルショップ金替^{カネガエ}】でバイトをしていた。そこで、三年振りの再会をはたしたのだった。ミドリちゃんはまたいつそう可愛さに磨きがかかっていた。この町にはひとつしかそういった類の店がなかった。ましてや、てつぼうに代わりに持って行って貰ったとしても、俺の事を有り余るほどの親愛を持ってばらしてくれるに間違いなし、車の免許を持ってない俺には隣町のリサイクルショップに持っているのはちよつと面倒だった。こんな俺にもよく考えてみると唯一続いている事が一つだけあった。それは映画鑑賞であった。そんな映画好きでロマンチストの俺は今年の夏に人生を賭けた大告白を計画していた。もちろんミドリちゃんへの愛の告白だ！

「マルー、電話よー！！！！まるー！！あんた聞こえてんのー！！」か

ーは声がマジでデカイ。部屋で昨日買ったばかりの5・1のサウンドスピーカーで、大好きな映画『マイノリティーリポート』を結構いい音で見えていたけど聞こえた。隣の家の山田さんのおばちゃんも「ハイイ」と返事していた。「あれ！どこ？俺の携帯？」と電話を取りにギシギシと音をたてる階段を下りて居間にいった。「あんた携帯電話を携帯しないなら携帯じゃないじゃない！しかもスグ切れちゃったわよ！あんたそれってワン切りってやつじゃないのー？あんた変なことしてんじゃないの？ほら横浜の吉田のさちこおばちゃん所のヒトシチャンいたでしょ。あの子オレオレ詐欺で捕まっただよ！」「マジでえー」「モービックリよ！さつちゃん今寝込んでんのよ！今度とーちゃんと、「さつちゃんを慰める会」でも開こうってしてたのよ。」「よーけいなことすんなよ！そつとしいてやれよ！マスコミとかでイッパイイッパイになつてんだから」「あ、そうそう*スーパーマコト*の店長んとこなんてたまたま家にお婆ちゃん一人に留守番させて、帰ったら知らない人にお茶出して、その人すーつと帰っていったらしんだけど、後でお婆ちゃんに誰が来たの？って聞いたたら孫のサトルだつていうんだつて！けど、どー見ても孫じゃなくて、なにか取られてないか探してみたら何にも取られてなくて、よかつたー！なんて言ったらおばあちゃん、おこずかいって言って10万もわたしちゃつてて、警察だー！何だつてー！って大変だつたらしいわよ。そしたら・・・ブツブツブツツ・・・」「ってというか普通にナゲエ！しかもワン切りじゃなくてメールだから！」「カーのどうでもいい世間話をシカトしてメールを見ると、てつぼうだった。

<おいっす！暑いですな！（切実）なにしてん？どーセクラーガ
ンガンにして映画でも見てんでしょ（笑）釣りに行こうよー！今日
はかなりいい感じに釣れるってじいさんが言ってたからさ！用意で
きたら連絡しようだい！>「釣りかあー！悪くねーな！よし用意
しよー！カー釣竿物置にあつたよなあ〜？」「さあー？あるんじや
ない？なに？なに？デート？あんた彼女いるの？家に連れてきなさ

いよ！」「ちげーよ！てつぼうと行くんだよ！彼女いても家にはつれてこねーし！」

・持ち物リスト：*釣竿*「物置にあつたはいいけど、きたねーな！」*餌*「この餌が臭くてやなんだよな」*網*「ちよつと穴開いてるけどまあ平気だろ！」*クーラーBOX*「こんな小さくてだいじよぶかな？」*海パン*「これ去年のだけどださいかな？」*コパトーン*「今日は天気良いから焼けるなー！」*おやつ*「てつぼうが好きな芋ケンピもって行ってやろう！」*CDウォークマン*「海でボブは絶対でしょー！てつぼうにも聞かしてやる！」5分もかからずに準備ができた。「まあこんなもんかなー！カー！釣に行つてくんナー！夕飯は期待しとけよ！」

海はチャリンコで、駅前の商店街を避けて、森林に囲まれた静かな住宅街を抜けると、俺の通っていた小学校が見えてくる。昔はあんなに大きかった校庭も今では何だかとても小さく見える。校庭の隅にある二ワトリ小屋を横目にわき道に入り、昔よく来た、寝ながら店番をしている駄菓子屋のばーちゃんが、死んでいるのではなく、寝ているのを確認しながら、海へまっすぐに伸びる大通りにでる。そして途中でローカルしか使わない海岸への抜け道にはいるが、久しぶりに来たせいか、何か変わったなと走らせていたら、軽く迷ったが無事海が見えてきた。ここまで1時間かかった。海は去年トシと来て以来ぶりで、なんだか部屋にあるサーフ用品達に申し訳ないような、ムカツクような複雑な気持ちになった。サーファーや海水浴客は、嬉しそうにやつときた夏を楽しんでいる。「おおー！まる！？まるー！！」覚悟はしていたがやつぱ会ってしまった。トシだ。トシは黒人より黒人つてぐらい焼けていた。髪もいい感じに潮焼けしていて、まさに“サーファー”だった。「マル、ちよー久しぶりじゃねーかよ！生きてたんかよ！波に流されちゃたんかと思つたよ！（大笑）」「お、おお。トシ！焼けてるなー！今日波いーの？」「えー（笑）？今日はいいんじゃねえーかー！セット頭だな！綺麗に割れてたよー！なに波乗り・・・じゃねーのかよ！釣りかよ！！

釣りも良いけど、せつかく良い板買ったんだからたまには波乗りしようぜー！板がグレちゃうよー！まあ連絡入れるよー！」「あ・あ・あ！近いうち行こうな。じゃあ！」「んー正直悔しいけどマジでかっこよかった。しかも、車はランクルに乗っていて、隣には可愛い女の子も乗っていた。「マル、握手うまくできてたね！俺と練習したかいあったね！いやーやつぱトシ君ってかっくいーねー！彼女可愛かったし！」「そ、そうかー！女、可愛かったか？よく見えなかった。「マルちゃん、ダセエよ・・・」。

灯台の近辺にポイントを決めた。準備ができ、海パンに着替え、途中の酒屋で買ってきたビールで乾杯！海でのビールは最高だった。今かわいいアイドルの話や、あの芸人は誰と付き合ってるとか、どうでもいい暇な主婦のような会話をしているうちに時間は有に一時間を越えていた。「釣れねーな！まあ天気も良いし、ビールもうめーし、人もそこまでいいねーからいいかあ！あ・てつぼう背中オイル塗ってくんねー！背中むけちゃうよ。」

「はいよー！でもホント天気いいーなー！夏だよなあー！彼女ほしーなー！」「彼女？いらねーよ！どうせめんどくさいだけだろ！」「今日てつぼうにミドリちゃんへの愛の告白大作戦について相談しようとしたが、言い出せなくなってしまった。「そうかなー！いいじゃん彼女！あートシ君いいよなー！サーフィンうまいし顔イケてるし俺さあ、ちょっとサーフィンやってみよーかな！トシ君教えてくれないかな？マル頼んでみてよ！」「んー、てつぼうじゃ無理だな！飽きつぱいしー体ほせーし、それに寒いのも無理だろ！結構夏とか言ってもずつと海入ってんのさみーよ！無理無理！！」なんか嫉妬してしまった。「えー！そうかなー！俺頑張るよ！しかも前からサーフィンやって見たかったんだー！したら、女の子にもモテたりして！だからお願い！トシ君に頼んでみてよ！」「てつぼうには無理だつて！それに、板だつてたけーよ！無理無理！」「んー！マルの板貸してよ！どうせやらないんだしー！トシ君教えてくれるかな？」「じゃあ自分で頼めよ！どうせてつぼうには無理だから！」「

なんだよ！無理無理って！ひよつとして焼いてんじゃないの？俺がサーフィンやることについて？マルが出来なかったからって・・・あ・ごめん・・・」アルコールのせいか、魚が釣れないせいか、歯が憂い今の自分達のせいか二人とも熱くなってしまった。「は！？お前喧嘩売ってんのか？人が下手に出てればいいきになりやがって！」

どかつ・・・ボコ・・・

「いてーな！なにすんだよ！ホントの事じゃねーかよ！また暴力かよ・・・ったくよー」てつぼうはビールの缶を蹴っ飛ばし、いつてしまった。てつぼうがキレた。てつぼうがキレたのは俺等が幼稚園の頃、どっかの小学生に 세인트聖也のおもちやを取られたとき以来見ていなかった。あの時の顔と同じだった。なんだよ！どーせ夕方位に電話してくるくせに！釣竿を投げて、ねっころがった。その時枕にしたリュックの中で何かがボリボリと割れる音がした・・・。

2 憩いの場所『磯』

気がつくともうすっかり辺りはオレンジ色になっていて、少し肌寒くなっていた。「ねちった・・・」携帯で時間を見ると七時を回っていた。「んー・・・。帰るか」転がってるゴミを拾い、転がってた服を着た。「イッテ！」肌が焼けまくっていた。「こりゃー風呂大変だな・・・。」海沿いを一人夕日を見ながら自転車で帰った。花火をやっているカッブルや4、5人のサーファー達は馬鹿みたいに大笑いしている。「ばーか」

家に着くと飯ができていた。「ただいまー。」「おかえりー！まあよく焼けたこと。手洗つてらしゃい！ご飯出来てるわよ！」「メシなに？っていうか釣れたかとか聞かないの？」「釣れなつかたんでしょー！あんたに釣られるほど魚だつて馬鹿じゃないのよ。早く手洗つてらしゃい！魚冷めちゃうわよ（笑）」「はい。」

「いただきますー。あれ？父ちゃんは？まだ帰ってないの？」「まだよー。どうせまた西村さんと飲みいつてんのよ！あんた電話掛かって来たら迎えにいつてちようだいね！」「えー！またかよー！

たまにはカーが行けよ！父ちゃん酔うとウザいんだもん！」俺のオヤジ、良夫は酒と人情が大好きで自分の限界を越えても飲んでしまいい帰って来れなくなることがたまにあった。そんな時は良夫行きつけのスナック「磯」まで迎えに行かなくてはならなかった。「駄目よ！私が行ったらあそこのママ返してくんないもん！あんたが行かなきゃ駄目よ！あ・そうそう、そう言えば今日釣りって、てつぼうと行ったんじゃないのね！私が帰ってくる時てつぼうにあつたわよ！なんだか浮かない顔してたけど、なんかあつたのかね？やつぱりあんた、デートだったんじゃない！なんて子？」「しらねーし、デートでもねーよ！てつぼう以外にも友達ぐらいいるから！ごちそうさまー！」「あ・ちよつと、あんたーもう少し綺麗に魚食べなさいよー！もーもつたない！女が出来る！男はすぐ・ブツブツ・」

部屋に戻って携帯を見たが、誰からも着信はなかった。携帯のメールも問い合わせしてみたが、メールも来てなかった。「別にてつぼうだけが友達じゃねーからいいよー！」ちよつと不安になってる自分がいた。部屋の中を見渡した。するとサーフボードがケラケラ馬鹿にしている気がした。「ちきしょう！待ってるよ！やってやるよ！」気が付くと寝ていた。何時か気になり、徐に携帯をとり時間を見ると、夜の一時半を回っていた。着信はない。すると携帯が鳴った。はつと携帯をみると、液晶には“良夫”とでていた。オヤジか・。。「おーマル！父ちゃんだぞ！チョット迎えに来い！磯で待つてるから・。」切れた。一方的かよ。しかもかなり回りがうるさかった。「めんどくせーな！」服を着て出かけた。涼しい夏の夜中はすごく気持ちよかった。虫の鳴き声と、遠くからはロケット花火の音が聞こえてくる。案の序「磯」は大盛り上がりだった。ママさんが出てきた。「あら！マルちゃんいらしゃい！チョットよっていきなさいよ！」「あ・どうもこんばんは！いや・。いいですよ。とうちゃんは？」「飲んでるわよー！もーあんたに会いたがつてる人いるから！早くーはいんな！」「え？じゃあ、おじやまします。」

久し振りに中に入った。昔はよく父ちゃんの後をくつついてジュースを飲ましてもらっていた。ここでしか許されないジョッキで飲むジュースが大人になった気分で大好きだった。「懐かしいな〜！この臭い」「おーマル！よく来た！ママーちよつとこいつにもグラスだしてやって！お前焼酎飲めんだろ？お・そうそう！覚えてるか？とおる君だぞ！」「うん・・・あ・こんばんは！お久しぶりです。」ママさんは相変わらず化粧が濃く、顔が真っ白だ。「はい！どーぞ！グラス！マルちゃん久しぶりに店の中入ったんじゃないの？昔はよくここで寝てたんだよ！しかし焼けてるねー！何サーフィン？とおるちゃんついてあげて！待ってたのよね！」「まあ・・・はい」すると、割って入ってきたオカマのおるさん、胸にはシリコンまで入って、又一段と女に近づいていた。「ちよーつと良夫チャン、マルちゃんいい男になったわねー！！覚えてる？お姉ちゃんの事？でもおもしろいわよねー、赤ん坊だったマルちゃんとこうしてお酒を飲むなんて！んで幾つになったわけ？」グングン焼酎をついでくるとおるちゃん顔が近いよ！そして髭が痛いよ！酒臭いよ！そしてもう酒はいいよ！「あ・すみません！あ・こぼれる・・・えー！8歳になりました。とおるさん・・・ちよつと顔が近すぎて・・・いや・ごめんなさい・・・」「何がとおるさんよ！とおる姉ちゃんって呼んでくれてたくせに！あんたのおしめ誰が換えたと思ってるのよ！ズボン脱がせるわよ！早く飲みなさいよ！もう夏休みでしょ？今日は朝まで行くよー！ちよつとー気分良くなってきたよ！歌つちやおうかな！ママア〜歌本取って！」怖ええよ・・・マジで。しかしとおる姉は歌がチョー上手いだった。昔バンドを組んでいて、暴走族にも入っていて、その道ではかなり有名で、デビューも決まっていたらしい。それなのに、今じゃこの汚いスナック磯でオカマとして近所のオヤジさん達と一緒にいるとおる姉さん。人生何が起るか分かんないものだ。何があつたんだい？ねえさん・・・

3 兄貴

一人で海に行った。すると、てつぼうがトシと楽しそうにサーフ

インをしていた。しかもかなりうまく波を取っている。「おーマル
うー！まだ釣りなんかしてんのカヨ！波乗りしようよ！あ・コレ俺
の女！みどり。マルの初恋の奴だっけ？わりいね。思い出汚して！」
はっと起きてしまった。「夢かあ・・・。」もう昼の十二時をま
わっていた。頭が痛い。昨日の記憶が曖昧だった。どうやって家に
帰ってきたのかも分からない。とおるさんと『サライ』を歌った記
憶はある。なぜか知らないがベットに自転車のサドルがある。まだ
ボーっとする頭で居間に向かった。「おはよ。あー気持ちわりい。」
「おはよってあんたもうお昼よ！机の上にオニギリあるよ！」「気
持ち悪くて食えない。昨日俺どうやって帰ってきた？覚えてないん
だけど。」「あんた覚えてないの？とおる君が帰るから、送ってく
れるっていつてんのにあんたがもう一軒行くってきかなくて、とお
る君とカラオケ行って送って来てもらったんじゃない！あんたお礼
の電話しときなさい！」「マジで。あーなんとなく思い出した。電
話しとく。」とにかく二日酔いで頭が、そして日焼けで体が痛い。
「ちきしょー泣きつ面に蜂かよ。今日も天気いいな。てつぼうなに
してんだろ？」電話してみた。留守電になった。まだ怒ってるのか
よ。なんだか夢が気になっちゃおうがない。暇だし、散歩がてら海
に向かうことにした。家には自転車がなかった。多分磯に自転車を
置いてきたのだろう。今日も海はサーファーや海水浴客で溢れてい
る。蝉も気が狂ったように鳴いている。気が付くとトシとてつぼう
を探していた。「いるわけねーか！なにしてんだ俺！？かーえろ！」
途中レンタルビデオ屋によってみた。＊恋愛ものコーナー＊熱い友
情ものコーナー＊そんなビデオがよく目に入ってくる。しかしどれ
も今は見る気にはならなかった。はつきり言って暇・・・。どうし
よう・・・あ・とおるさんにお礼言わなきゃ！昨日電話番号教えても
らったんだよな。仕事かな？ってどうか仕事なにしてんだろ？「も
もし・・・とおるさん？」「もしもーし！あら！マルちゃん！
昨日は楽しかったね！あんた結構飲めるのね！あ・そうそう自転車、
磯に置いてあるわよ。あんたフラフラなのに乗って帰るって言うか

ら無理だからって、サドルだけ持たしたのよ!」「とおるさん昨日はありがとうございました。楽しかったです。ごめんなさい。酔っ払っちゃって・・・それとお金は・・・」「なに言ってるのよ!かしこまって!とおる姉、マルちゃんの仲じゃない!それに、あたしが楽しんだんだから、お金なんつていいのよ!そのかし将来倍返しだからね。ところで、仲直りはしたの?」「えっ・・・」「仲直り?なんでしたの?俺言っただけ?」「いやまだ・・・。」「なにしてんよ!男なんだから女みたいな喧嘩してんじゃないよ!殴りあえばいいのよ!そういうものよ!男なんつて。私が言っても説得力ないけど・・・キャハ!んな感じだからさ、また行こうね!あんたの歌声よかったよ!ソウルフルだったわよ!頑張りなさい!マルちゃんなら大丈夫だから!なんかあったらいつでも姉ちゃんに電話してきなさい!バイバイ!」「ジョリ!」「ジョリ?あ・髭の音か!ありがと!とおるの兄貴・・・あーそうだよな!こんなのめんどくせーよ!てつぼうの家に行こう。直接謝ろう。

442・195キロ

なんて謝ろう?なんて切り出そう?素直に謝って、ミドリちゃんの相談をしよう。そんな事を考えていたらもうてつぼうの家の前に着いていた。インターホンを押すのが憂鬱だ。小学校の時てつぼうと近所の家に石を投げてガラスを割って謝りに行った時を思い出した。「はあ・・・よし!」「<ピンポン>>なんだかやたらインターホンが響いた気がした。「はい!」「おばちゃんの声が聞こえ、扉が開いた。

「はい?あらマルちゃんこんにちは!あれ?うちの子と一緒にやなかったの?なんだかサーフィン始めるんだって!ってサーフィソップいったけど・・・もうすぐ帰ってくると思うけど・・・。」
体に衝撃が走った。なんだか裏切られた気持ちがあった。俺は物心ついた時からてつぼうと一緒にいた。てつぼうというあだ名も俺がつけた。てつぼうは俺より背が大きいけど、シャイで遠慮しがちなやつで俺はどこかで見下していたのかもしれない。いや、俺は世の中

の奴らを見下しているのかもしれない。てつぼうは自分から進んで何かをやるうとするタイプではないだけ、自分からサーフィンをやるうとしているてつぼうが怖かった。「あ・そうですか。わかりま・。」「後ろから車の止まる音が聞こえ、「ありがとね！付き合ってもらっちゃって！明日じゃあ朝海で！」てつぼうがトシの車から降りてきた。「ただい・マル？」「あらちょうどよかった！マルちゃん来てくれてるわよ・マルちゃん？へんな子ね？なんかあったの？」とにかく走った。逃げた。今俺どんな顔で走ってるんだろう？想像もつかない。なんだかドラマとかで見たことがあったが、今こうして俺は走っている。とにかく見えなくなるまで走ってやる。これじゃあ女の喧嘩とかわんねーじゃん。ム力ついたら殴るで仲直りするんじゃないのかよ。しかも心のどつかで追いかけてくるてつぼうの姿を想像している。どれくらい走っただろう。俺このままじゃ本当に駄目になる。

久しぶりにこんなに走った。やっぱりてつぼうは追いかけてはきていなかった。泣いていた。涙が止まらない。自分には何も無いことに気づいた。これって挫折なんだろうかと大げさに考えたりもした。とりあえず今言えることは俺は世界一ださい男だ・。もうわかんなくなつた。よくてつぼうと通る道で、何も考えずにいつも使うこの道で、歩くことさえやめて、立ち止まっていた。もう分からない。電話しよう、とおるさんに・。。

5 K O

「はい！マルちゃんどーしたの？」「あ・こんにちは。とおるさん今、平気ですか？」「ん？今から仕事行くところだけど・。なによその声！あんた、私のテンションまでさげさせる声だして！私の仕事テンションがだいじなんだから！どーしたのよ？友達の事？なにがあつたのよ！」「もうわかんないんです。自分で何か・。」「ずいぶんヘビーなこと言い出すわね！今どこいんの？」「今は・。磯の近くです。」「磯の近くかあ・。わかつたわ！今日仕事休みだったわ！うちにいらしゃい！うちわかんないわよね？じゃ

あスーパーマコトわかるでしょ？そこまできなさいよ！」「あ・はい。」「ダミ声のとおりさんの声にこんな安心するとは思いません。つかた。スーパーマコトの前で五分位待つてると香水のきつい匂いと共にとおりさんが現れた。「ごめん！待った？またそんな暗い顔して！暑いから家いこ！」手をひっぱられてた。とおりさんの手は顔の割には細くスベスベだった。そんなとおりさんの手を心なしかギョツとにぎってしまった。

とおるさんはこの辺では珍しい茶色い結構いいマンションの二階に住んでいた。「さあ！あがつていいわよ！ちよつと汚いかもしれないけど、気にしないでね！パンツとか転がってるけど、もつてかえつちやだめよ！」「あ・はい。おじゃまします。」「部屋の中に入るとすごい広いリビングに真っ赤なソファとプラズマのデカイテレビが置いてある。そしてなんともいえないお香のいい匂い。やつぱりなんの仕事をしているのか気になる。「コーヒーでいい？それとも、ビール飲む？」「いや、コーヒーでいいです。すみません。」しかし、本当に部屋を見渡すと高そうで派手なものばかり目に付く。「んで、どうしたの？・・・なに！そんなにキョロキョロしちゃって？」「いや、前から気になっていたんですけど、とおるさんって何の仕事やってるのかなあーって？なんか高そうなものばかりあるから・・・」おもむろに転がっていたDVDを手に取ると、「シービスケット」と汚い字で書いてあった。「あ！その映画知ってる？」話を流された。「競走馬に向いてない馬がいて、馬が大好きな主人公と巡り会って、名馬になるっていう実話ですよ。僕もこの映画大好きです。」映画のことなら任せろって具合いで答えた。「そうそう！私もその馬みたいな人生をおくりたいのよ！」「え？馬の人生？」「あ・違っわよ！別にエンジンを死ぬほど食べたいとかじゃなくて、なんて言うのかな・・・もう駄目だなって思うことってあるじゃない！けど、そう思ったら負けなのよ。なんでもそうだと思っけど、自信が大事よ！！自信！そう！だから、自分の事もうちよい理解してあげて、自信もっていけばなんだって出来ると思うの！人は

なにかひとつ絶対いいものって持つてるのよ！それにうまくきずいてあげるのよ！そうすると、運命って面白いのよ。私は宗教家じゃないけど、なんかそういう神様がいるとおもうのよ！どこかで見られているんだと思う。すると、自然とめぐり合えると思うの。それは、彼女にしる、友達にしる。だから、常に全力で頑張れば報われるのよ。それに、まだ若いんだし、失敗したって喧嘩したっていいじゃない。うまくなんて生きようとするからわかんなくなっちゃうんじゃないかな？若いうちは一杯悩んで、色んな事考えな！自分自身の事を。それで、余裕が出てきたら他人のことをしっかり考えればいいのよ！それで大事な人とは、喧嘩しても最後には絶対仲直りするの。そうすればみんな幸せになれると思うよ。自分の事好きになんきゃ人なんて好きになれないし、ついても来ないよ！けど、うぬぼれとは違うの！オカマの私が言うのもなんだけどさあ、(笑)でも私は自分に自信あるし、自分の事好きだよ！周りの人達には沢山迷惑かけたけど・・・だから私、私に幸せをくれた人達は絶対忘れない。友達、先輩や後輩や・・・後、親には。幸せになってもらいたい・・・こんな私だつて今だに悩んだりするよ！そんな時は周りの仲間に甘えればいいのよ！もう何も言わない！後はあんなが考えな！それに今悩んでる事なんつて時が過ぎたらいい思い出よ！マルちゃんなら大きな人間になれるから！「素晴らしい終えたとおるさんの目には涙が溜まっていた。心にグツと熱いものがこみあげてきた。俺はオカマにはなりたくないが、とおるさんみたいな熱い人間になりたいと思った。そして、強く頷いた。「なんだか、湿っぽくなっちゃたわね！ビールでも飲もうか！」「はい！」「かれこれ二時間は飲み続けて、少しの沈黙の後とおるさんがCDコンポでエリック・クラプトンのティアーズインヘブンを流し、照れくさそうに話を切り出した。「私ね、こうなる前、バンドやってたのね。歌が大好きで、大好きで、勉強もしないで歌の練習ばかりしてたの。そしたら19歳の時そう今のマルちゃん位の時に、デビューの話が来たのよ！最初はやっと認められたな！これまでやってきてよ

かったな！って思ったのよ。でも実際そうじゃなかったのよ。私が
思ってた世界じゃなかったのよ！切り捨ての厳しい世界でしょ。今
度はどうすれば売れるとか、どうすれば流行るとか考えるようにな
っちゃたのよ。まあ若かったのもあるし、勇気がなかったのかもし
ないけど、もう歌が嫌いになりそうになってたわ。そんな時ある
人がこういったの。メジャーになるだけが成功じゃないって！そり
ゃあ、世間に認められたらすごいことよ！けど、それで好きなこと
が嫌いになるのなんて寂しいって。かわいそうだって。そんな事言
われたってせつかく来たチャンス逃したくないじゃない。それで、
その人と喧嘩になったのね！お前に何が分かるんだ！ひがんでるん
じゃないかって！そしたら、その人次の日交通事故で死んじゃった
のよ。仲直りもしないで……。そいつ私のライブとかにも一回も
見に来たこともない奴だったの。でもお葬式の人に私の知らないそ
いつの友達に会ったら、私の事を自分がデビューするぐらい嬉しそ
うに私の話してたって。それでCD聞いてくれって！何枚も私のC
D買って配ってたのよ。そいつ……。少し照れくさそうにとおる
さんは笑い話を続けた。「だから、べつにオカマになったわけじゃ
ないけど、私はみんながいて、みんなが笑ってくれるそんな場所が
私の居場所なんだなって思ったのよ！」俺も酔った勢いを言い訳に
して話し出した。「自分でも分かってるんです。甘いつて。自分で
なんとかしなきゃって。このままじゃ駄目だって。けど、俺なんも
ないし……。ダサいし……。けど自信持ってやんなきゃってと
おるさんの話聞いてて思ったんですよ。けど、やっぱり自信持てな
いって言うか……。なにに自信もてばいいのかなって。」「すると
とおるさんはいきなり立ち上がり、地声で「ちよっとお前立てよ！」
と俺の髪の毛を強く掴んだ。ビックリした。いつも裏声みたいな汚
い声しか聞いたことなかったとおるさんの声はマジで貫禄のある声
になった。「はい……。」「歯食いしばれ！」「歯を食いしばり、
殴られると思いい目をつぶった。
ドゥス……」

マジでグーできた。しかも腹に……。息が出来ず、記憶も遠のいてその場に倒れた。さすがに元男子のとあるさんのパンチは本物だった。カンカンカーンッとゴングが聞こえた。

6 キャラかぶり

気がつくと、フカフカのベットで寝ていた。そしてどこからともなく、シクシクと泣いている虫みたいな声が耳の近くで聞こえてくる。その声の方に顔を向け目を開けてみると、その声の生き物と目が合った。「うあー！ジンメンカメムシ！」と叫んだ。「あ・よかつたー！目覚めたのね！死んじゃったかと思った。しかも、ジンメンカメムシはマレーシアの方にしか生息しないのよ！」と涙で人の顔ではないぐらいに化粧が落ちたとあるさんであった。「あれ？おれ・寝てました？あ・とおるさんに腹殴られて……。」「腹をさすると、シップが張ってあつた。「ごめんねー！いたかった？軽く気合入れてあげようと思つたら、もろはいちやつた！」「元のとあるさんのしゃべり声に戻っていた。「いやー！だいじよぶです！ありがとうございます！なんかすっきりしたし、気合はいりました。」すると、ホツとした笑顔で「そっか！じゃあもう考えないで後は行動しなきゃね！まるちゃんなんか得意な事とか好きな事本当にないの？」「んーないですね。あ・一個あつた……。」「ナニナニ！？言ってみなよ！」笑われる覚悟で、しかもちよつと笑いがとれるかと思つて言つてみた。「映画鑑賞……。」「すると、とおるさんは笑いもせず、真剣な顔で「そっか！それは誰にも負けない？」意外な返しに「んー負けないつて言われたら……。けど、結構色々見えてきたしー負けないかもしれません。映画は大好きですから！」「だったら、今度から見た映画の感想文書いてみなさいよ！ここがよかつたとか、悪かつたとかさ！何でも良いから！そしたら私に見せてよ！そういうことから始めていこうよ！ね！」それだつたら俺にも出来るつと思つた。それだつたら俺にも続く何の曇りもなく思つた。初めてみよう！なんでも。サーフィンだつて……。すこしずつ……。

この夏、俺は少し大人になれたのかもしれない。案の定ミドリちゃんには撃沈されたが、俺は十八の夏を思い切り楽しんだ。映画も100本以上見たし、サーフィンも少しくまくなった。とおるさんとも沢山飲んだし、てつぼうとも沢山喧嘩もした。しかし秋を感じさせる虫の泣き声が聞こえてくるころ、少し悲しいニュースがあった。それは、とおるさんの失踪であった。シヨックだったが、俺はもう泣かない。強くなったから！でもこれだけは言える今でも何処かで歌を歌ってるに違いない。

それから十数年。

「マルさん携帯鳴ってますよ〜！」「はい！はい！ちよつと〜あんた今私打ち合わせしてたんだから〜出てくれても良いじゃない！まったく使えない子ね〜！」「すいません！いやでもてつぼうさんだから・・・」「なにでつぼうから〜！？もう！早く言つてよ！はーい！もしもしく〜どうだったのよ？」「おーう！マル相変わらず忙しそうじゃん！一昨日テレビ見たよ！」「あら！ありがとう！昨日のはイマイチ切れが悪かったのよね！あ・そんなことはど〜でもいいのよ！どうだったのよ？大会は？え？優勝？今度はハワイで大会にでれるの〜？すごいじゃない！私があげたりーシユコードのおかげね！え？なに？私とかぶってるキャラの人がテレビに出てる？誰よ！それ〜つれてきなさいよ！私は・・・」

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5440b/>

あの歌が聞こえてくる

2010年10月14日23時23分発行